

三十にして起とう

副病院長 鳥居光男

昭和53年創設の鹿児島大学歯学部は、平成20年に30周年を迎えた。

私は、平成8年12月に本学に赴任したので、30年の歴史の内、直近の10年しか在籍していないので、古いことは名誉教授の先生にお任せして、ここ10年とこれからのことを。

私の赴任以来最大の出来事は、平成16年の国立大学の法人化であろう。国の完全な庇護の元で暮らしてきたのが、競争社会へ放り出された。その結果、元から相当力の差がある大学が、同じ土俵で戦わなければならなくなった。戦力二乗の法則を持ち出すまでもなく、普通に戦えば大は小より強いのである。その時小はどう戦うか。1点に戦力を集中させ、局所優勢に持って行き、各個撃破ということになるだろうか。しかし、歯科医学教育については、どうしても教育しなければならない範囲があり、1点豪華主義ともいかず、統帥上もっとも避けるべき事の一つである兵力の逐次投入にも似た、ある程度の平等主義もしかたがない。

病院に関しても、歯科は各科の積み上げで診療を行っており、どこかを重点的というのも程度がある。また、私は歯病としてはどんな歯科疾患についても鹿大病院へくれば対処できるというようにしたいと考えているうえ、病院統合以来、副病院長が差配できる資源は極々限られたものになっている。

さて、歯学部は昭和57年に小児歯科学講座が設置されて一応の完成をみた後、平成9年に歯科基礎科学講座が新設された以外、新しい講座の創設は行ってこなかった（平成4年に歯科麻酔科が附属病院の診療科と

して設置され、平成15年の大学院統合で大学院の分野になったことはある）。歯科基礎科学講座にしても、全国的にもユニークで誇るべきものではあるが、いわゆる教養部解体にともなって歯学部へ移籍させるべき教官数を与えられたからできたもので、歯学部自身が自らの発想で創設したものではない。

歯学部発足以来30年で、歯科医学は大きく進歩し、従来の講座の枠組みを超えた学問分野も出てきている。このような事態にどう対処してきたか。統合講義のような形で、いくつかの分野から教官が出てきて一つの講義を作り上げる。あるいは、これは自分の講座が教えなければと自覚した講座にお任せし、あちこちが細切れで教育する。といったところだろう。ここらで、新しい分野に対し責任を持って教育・研究を遂行できるように、新講座の創設も視野に入れた将来計画の立案が必要であろう。もとより国の財政は厳しく、人員削減はあれこそ、新しい講座を作るからといって人員をくれるような時代ではない。しかし、現代の歯科医学教育に対処するため、現在の教員から身銭を切っても捻出して、新しい講座の事を考える時期にきているようだ。歯学部歯学科の充実のために。

平成19年度から鹿大病院の再開発がやっとスタートした。歯病も現在の医病の東端に新しく新外来棟として新築が予定されている。もっとも、再開発計画の最後に予定されているので、移転はほぼ10年後である。新病院へは新しい枠組みで移りたいものである。

三十にして起とう!!